

一七世紀中葉のサセックス王領地における支配構造

——議會派の調査記録の分析——

武 暢 夫

一 問 題

本稿の課題は、一七世紀中葉の市民革命の時期に勝利した議會派政府によって行われたサセックス王領地の調査記録の分析によってそこの封建的土地所有の内容を明らかにし、イングランド南部における農村構造の解明のための一つの素材を提供することである。筆者は、イギリス農業における資本主義の發展過程を全体として把握することゝ当面の研究課題としているが、そのためには、それぞれの時期のそれぞれの地域における農業發展のあり方についていっそう多くの実証的研究を積み重ねていくことが必要であると考へている。⁽¹⁾ 本稿は、右の目標を達成するための具体的素材の一つを用意するという意味を持つものである。

いうまでもなく、封建制度の下では国王が法律的には最高・唯一の土地所有者であり、領主は国王から土地を授封され、その土地をさらに直接生産者たる農民に分与するものであり、したがって、こゝでの土地所有關係は最高・唯一の土地所有者たる国王と封建領主との關係、封建領主相互の關係、ならびに封建領主と土地保有農民との關係に大別される。このように、封建的土地所有は現実の土地の上に国王の絶対的所有權、領主の領有權、農民の保有權が重

なり合うという重層的な構造を持っており、かかる重層的な構造から、国王を頂点とする封建的土地所有者内部の支配・従属の関係ならびに封建的土地所有者と農民との支配・従属の関係が生じる。それゆえ、封建的土地所有とは、右のような重層的な土地所有関係および、そうした所有関係にもとづく支配・従属の関係を意味するものといふことができる。

そこで、特定の領地における封建的土地所有の内容と場合、当該領地の領主がいかなる封建的権利にもとづいてその領地を領有し支配するのか、領主の支配を維持するための支配機構はどのようなものであるか、そして、土地保有農民の封建的諸負担の内容はどうであるかという点に問題を集約することができるのであり、本稿においてもこうした点を中心に検討を進めていきたい。しかし、王領地については、さらに次の点に注意しておかねばならない。それは、国王が封建的土地所有全体を支配する地位にあるところから、王領地の管理機構と封建王制ないしは絶対王制の支配機構とが錯綜し、問題を複雑にしているということである。ここでは特に絶対王制の支配機構との関連が問題になるが、絶対王制はブルジョアの発展に対応して弛緩した封建的土地所有体系を全体として再編し、維持するという役割を負わされているのであり、王領地における封建的土地所有の内容という問題もイギリス絶対王制の農業・土地政策、財政政策その他の諸政策と密接な関連をもってくる。もちろん、このような問題は王領地の全体的な状況を絶対王制の経済政策全般と関連させながら検討することによってはじめて明らかにできることであるが、絶対王制の政策の影響は個々の王領地についても反映されているはずである。そして、それは地域によって必ずしも同一ではなかったであろう。本稿は、あくまで、サセックス王領地という一地域の具体的な状態を明らかにするという点に問題を限定しているが、右のような点も念頭においている。

こうして、王領地は封建的領地の中では特殊な性格をもっている。だが、国王といえども、その家計 household の

大きな部分は封建地代によって維持されてきたのであり、そのために広大な王領地を維持してきたのであり、王領地においては封建領主として土地保有農民と支配・従属の関係を結んでいるのであり、そのかぎりでは他の封建領主と共通の性格を持つものである。それゆえ、王領地の状態の検討は封建的所領、特に、巨大封建所領のブルジョア的発展にたいする対応の一つのタイプを示すものといってもよいであろう。それはまた、王領地における多数の土地保有農民の解決すべき課題がなにかを明らかにし、市民革命の土地問題解明のための一素材を提供するであろう。

註 (1) 当面の時期のイギリス農業史研究はイギリス革命における土地問題を中心におこなわれ、幾つかのすぐれた論稿が発表されていることは周知のとおりであり、改めて紹介する必要はないであろう。ただ、革命の土地問題の評価をめぐって論争が展開されたわりには、その基礎となるべき当時のイギリス農村の具体的・実証的研究が不足していること、特に、農民層分解の問題もさることながら、当時の封建的土地所有の実態についての研究が不足していることを指摘しておきたい。

(2) もちろん、それぞれの王領地における封建的土地所有のあり方は、単に王領地管理の一般的な政策のみならず、当該地域における農民層のブルジョア的発展の影響を受けるところが大きいであろう。後者の問題については、別稿で扱うつもりである。

二 史 料

市民革命のときに議会議派の政府によって行われた王党派所領、教会領、王領地の調査記録、すなわち、いわゆる議会議派の調査 Parliamentary Surveys は、一七世紀のイギリス農村史研究に坎んする重要な史料の一つであるが、まだ十分には利用されていないように思われる。⁽¹⁾ この記録の中で印刷されたものは少ないが、サセックス州については、議会議派による王領地調査の記録が『サセックス考古学会論集』第二三～二五巻に収録されており、本稿ではそれに依拠した。

周知のように一七世紀中葉のイギリス市民革命（一六四〇—一六六〇年）においては勝利した議会議派によって王党

派所領、教会領、王領地の差押え Sequestration、示談金制 Composition、Compounding、そして売却という一連の政策が実行された。王領地については、一六四三年九月二二日の条令によってその差押えが決定され、一六四九年七月一六日の条令によってその売却が決定され、この王領地売却に関連して王領地の調査が行われることになったのである。⁽⁸⁾そして、王領地の調査に際しては、特に次の点を明確にすることが要求された。それは、(1)調査されるマナーの年収 annual perquisites and profits、(2)占有されている家屋敷あるいは譲渡されたことがわかつている家屋敷のすべてについての詳細、(3)さまざまの領地 estates における樹木 timber の価値の計算、(4)特許状 patent、借地権 lease、および特に支払金 reprises の目録、(5)マナーの慣習、共同地、境界、荒蕪地にかんする覚え書、(6)その家屋敷が表示されたマナーの保有者 tenants の土地台帳 rental、(7)全調査の価値の総括的な摘要、つまり、調査の特徴点の概括である。⁽⁴⁾以上の点について正確に記録した調査記録が存在するとすれば、それによって、われわれは当面の時期の王領地における封建的土地所有の具体的な存在形態、土地保有農民の分解の実態、農業経営の特殊性などをかなりの程度に明らかにしうるであろう。

サセックス王領地の調査は、リンカンシャーやミドルセックスの調査とともに、かなり詳細かつ正確であって、調査長官 Surveyor-General から賞讃されたといわれている。⁽⁹⁾表一は、議会派の調査が行われたサセックス王領地の目録である。これらの調査を区分するについては、調査の内容にしたがって、あるいは、行政区域(レイプ Rape ないしはハンドレッド)別に分類するなどの方法が考えられるが、ここでは右の両方の事情を勘案して、次のように分類することが適当であると考えられる。

- (1) ①～⑨の調査はすべてハンドレッドないしはレイプを単位として行なわれ、調査様式が共通しているので一括して扱う。
- (2) ⑩～⑬、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓～㉕、㉖～㉗の調査はいずれもランカスター公領 Duchy of Lancaster に属する地域にかんするものである。

表 I 議会調査における調査地名

No.	地 名	調 査 時 期	
		年	月
①	Aldwicke & Winkford	1651.	11
②	Bosham & Dampford	1651.	10~11
③	Bosham, the hundred of	1651.	10~11
④	Buttinghill	1651.	10~11
⑤	Kings Barnes	1651.	10~11
⑥	Manhood	1651.	10~11
⑦	Payning	1651.	10~11
⑧	Stenyng	1651.	10~11
⑨	Tipnocke	1651.	10~11
⑩	Ashdown, the forest of	1656. 9 1658. 3	
⑪	Ashdown, Com Deane Lodge	1658.	3
⑫	Ashdown, Warren Lodge	1658.	3
⑬	Ashdown, Hind Leap	1657.	3
⑭	Ashdown, White Deane	1657.	3
⑮	Ashdown, Old Lodge	1658.	4
⑯	Ashdown, Broadstone Lodge	1658.	5
⑰	Ashdown, Pippinford Lodge	1658.	4
⑱	Ashley Mills	1650.	4
⑲	Bexhill & Hoe	1650.	8
⑳	Bexhill	1656.	9
㉑	Bexlsy & Pease Marsh	1650.	7
㉒	Cheseworth House	1650.	4
㉓	Cheseworth & Sedgwick	1650.	4
㉔	{Cheseworth, Coalstape & Ashley Mills	1650.	7
㉕	Cottesford Mill & Forge	1656.	8
㉖	Duddleswell & Great Park of Lancaster	1650.	6

(3) ⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖の調査の対象となる地域は、相互に隣接し、まとまった地域を形づくっていると思われるので、一括して扱う。
 (4) その他の調査については、その対象がマナー全体である場合と、個別的な地片ないしはその他の物件である場合とに区別することができる。
 以下においては、以上の区分にしたがってそれぞれの地域の状態を検討していくことにしよう。

表1 議会調査における調査地名 (続)

No.	地 名	調 査 時 期	
		年	月
27	Duddleswell, the manor of	1656.	9
28	Endlewick, the manor of	1658.	7
29	East Grinstead & Longfield	1652.	7
30	Helsham	1650.	5
31	Helsham	1656.	8
32	Colstaple	1650.	4
33	Horsham	1650.	7
34	Iden	1656.	8
35	Lengnersh	1650.	7
36	St. Leonards	1655~ 1656.	1
37	Lewis	1650.	8
38	South Mailing	1649~ 1650.	2
39	Ouldberry	1650.	7
40	Pevensey	1649.	10~11
41	Pemsey	1649.	3
42	Pevensey, lands in the M ^r of	1650.	3
43	Baylewick, the Rape of	1652.	7
44	Pevensey, Manor of	1650.	5
45	Pevensey	n.	d
46	Ridgwick	1651.	10
47	Ridgwick	n.	d
48	Seabeech	1650.	7
49	Sedgwick Lands	1650.	4
50	Sharenden	1650.	5
51	Old Shoreham	1651.	10
52	Tortington Farm	1656.	8

(1) 議会派の調査記録を利用した本格的な研究については R. Lennard, *Rural Northamptonshire under the Commonwealth, Oxford Studies in Social and Legal History*, vol V., 1916. S. J. Madge, *The Domesday of Crown Lands*, 1938. をあげることが出来る。このほかには、例えば、サウマンなどもの史料を利用してゐるが、十分に利用されてゐることはないがたい (C. И. Савин, *История одного восточного манора, Сборник в честь М. К. Любовацкого*, 1917, стр. 25~279. То же, *История двух маноров, ЖМНП*, 1916, Ноябрь, стр. 193~240). 王領地研究にかんする簡単な史料・文献批評については Madge, *op. cit.*, pp. 3~10 を参照。

(2) J. R. Daniel-Iyssen, Esq., *The Parliamentary Surveys of the County of Sussex, Sussex Archaeological Collections*

Vol. XXIII, pp. 224~313, Vol. XXIV, 189~287, Vol. XXV, pp. 23~61. なお、以下の引用では *Sussex Archaeological Collections* を S. A. C. と略称する。

- (3) この間の経過については、さしあたって、武暢夫「イギリス革命における農業問題の特質」『社会経済史大系』Ⅳ、一七九（一八八ページ）を参照。詳しくは Firth and Tate, *Acts and Ordinances of the Interregnum*, C. Hill, The Agrarian Legislation of the Interregnum, Eng. H. R. Vol. LV, No. 218, 1940 など参照。
- (4) Madge, *op. cit.*, pp. 141, 334~340.
- (5) *Ibid.* p. 141.

三 王領地管理制度の変遷

ごく一般的にいえば、特定の時期の特定地域における王領地の状態を観察するに際しては、それぞれの時期の王領地管理政策とそれぞれの地域の特殊性という二つの要因を考慮に入れることが必要である。したがって、サセックス王領地に属する個々の領地の個別的検討に入る前に、王領地管理制度の変遷を概説しておくことが便宜であろう。

1 チューダ王朝以前の時期

王領地は大別して次の三つの範疇に分かれる。第一は、国王の「古来の本領地」「ancient demesne」といわれるものであり、かつてサクソン王朝の王領地であったが、ウィリアム一世の征服ののち引き続いて王領地として留保されたものである。この中には、国王の本領地の一部として国王に帰属する多くの中世都市を含んでいる。第二は、「獲得された本領地」「acquired demesne」といわれ、ドウムズデイののち相続人欠如による土地没収 *escheat*、叛逆ないしは勅許違反による土地没収によって恒久的に国王の所有に帰した土地、ならびに、保有者が未成年で上級領主たる国王の後見 *ward* を受け、一時的に国王が保有している土地である。第三は御料林 *Forest*、獵園 *park*、狩獵地 *chase* に属する土地である。そして、それぞれの範疇の土地について、同じ王領地であっても、管理の仕方がやや異なる。

っていたのである。

さて、初期の時代には、王領地収入の徴収の主要責任者 *chief agent* は州長官 *Sheriff* であり彼は王領地の代官 *custodes or bailiffs* として、あるいは地代徴収請負人 *"farmers"* として管区内のマナーや領地を委託されていた。⁽⁴⁾ こうして、州内の王領地の全地代は請負に出された *"let to farm"* 形となり、州長官は毎年一定額の地代を財務府 *Exchequer* に納付し、財務府をつうじて国王のもとに達するという方式になっていた。⁽⁵⁾ もっとも、州内のすべての収入が常に州長官によって徴収されたというのではなく、都市の地代 *fee farm rent* はそれを管轄する別の代官 *custodians* ないしは徴収請負人 *farmers* によって別々に提出されるのが多かったといわれる。⁽⁶⁾ 没収地 *escheats* からの収入は、小さいものについては州長官が扱ったが、大きいものについてはその徴収を請負う特定の人物、あるいは、その領地の実際の管理人自身によって財務府に提出されるのが普通であった。⁽⁷⁾

こうして、早くから「没収地の管理人」*"custodes escaetarium"* として後に土地没収官 *escheators* と称される役人が没収地からの収入を管理するために任命されたが、ヘンリー三世の時代の中期にいたって、王領地はトレント川を境に北と南の二つの区域に分けて管轄され、それぞれの地域の巡回判事 *the Justices of Eyre* が王領地管理の最高責任者となった。⁽⁸⁾ その後、没収地管理制度はしばしば変更されたが、一三三四～五年、トレント川の北の区域はそのままにして、南の区域が七つに分割されて合計八区域となり、各州（あるいは二州のグループ）の州長官が土地没収官に任命され、一三七七年にはイングランドとウェールズが一九の管区 *Escheatrics* に分割、管理されることになった。⁽⁹⁾

2 チューダーおよびスチュアート王朝の時期

これまでの時期においては、州長官が扱うにせよ。その他の役人が扱うにせよ、王領地からの収入は究極的には財

務府に集約され、そこから国王の手に渡るといふ形をとっていた。ところが、ヘンリー七世の時代に入り、従来のような財務府中心の管理方式に代って、王領地収入の支払をより敏速にするため、王領地収入の会計を処理する特別委員 special Commissioner を任命し、「国王の間」 King's Chamber で国王に直接支払うか、あるいは、特に収入の受領を任命された者 (The Treasurers of King's Chamber) に支払うという方式が採用されることになった。⁹⁹⁾

右の方式はヘンリー八世によって踏襲され、さらに整備された。一五一一年、「王領地の総調査官および告発官」 "General Surveyors and Approvers of King's Lands" が任命され、彼らには「ホワイ・ホール宮殿」の「君主の間」 "Prince's Chamber" に会計官 accountants を召集し、王領地収入の会計を提示させる権限が与えられた。そして、翌一五一二年の条令において、今後、総調査官の支配下に入るべき土地と収入の明細が示された。¹⁰⁰⁾ このことは一五一四—一五三五年の一連の条令によって確認されたが、さらに一五四二年の条令によって「王領地総調査庁」 "Court of General Surveyors of the Kings Lands" が設立され、総調査官にたいして彼らの管轄する土地 (権利剝奪や没収 attainder, escheat and forfeiture によって国王に帰属した土地) について他の一切の外的な権限と司法権 authority and jurisdiction から独立した地位が与えられた。¹⁰¹⁾ 他方、一五三六年、小修道院の解散によって大量の土地が国王の手に移ったので、同じ年の条令によって「王室増加収入庁」 Court of the augmentation が設立され、解散修道院領および購入・交換によって獲得された土地収入の管理に当たっていた。¹⁰²⁾ 一五四六年、前記の二裁判所は廃止され、代ってこれらの機関の機能を兼有する新しい「王室増加収入庁」 "A new Court of the Augmentation" が設置された。¹⁰³⁾

これより先、一五四〇年、「後見裁判所」 "Court of Wards" が設立され、そして国王からの直封保有 tenure in capite に付帯する収益を管理されることになり、翌一五四一年にはそれに「騎士保有地引渡裁判所」 "Court of Liveries" が加えられた。

一七世紀中葉のサセックス王領地における支配構造 (武)

erles”が合併され、新たな「後見裁判所」“the Court of Wards and Liveries”が発足した。こうして、国王直封の土地保有者から徴収されるすべての封建的支払が「後見裁判所」に集中され、封建的な君主権が以前よりもさらに厳格に行使されることになった。⁽⁶⁰⁾ 以上のような措置によって、弛緩した封建的土地所有体系を再編し、それとともに、土地から派生する王室収入の増加をはかろうというイギリス絶対王制の土地政策は、ひとまず、その形を整えたといふことができる。

ところが、王領地管理の重要な機関であった「王室増加収入庁」は早くもメアリー女王治世の初に廃止され、王領地収入の管理は再び財務府に移され、⁽⁶¹⁾ 「後見裁判所」だけが市民革命によって廃止される（一六四六年）まで存続したのである。なお、王領地収入の管理の財務府への移管にともない、州長官が管理する旧方式と大蔵卿 Lord Treasurer の任命する委員が管轄する新方式の二つの方式が併用され、次第に新しい方式に切りかえられていったといわれる。⁽⁶²⁾ ともかく、こうしたことは、絶対王制の財政機構の改革にもかかわらず、王領地の統一的な管理が次第に困難になっていったこと、そしてまた、絶対王制の支配機構の内部にさまざまな矛盾が生じていたことを示している。

しかも、絶対王制の財政支出が増大するとともに、王領地からの収入を増大させる必要も増大した。こうした事態に対処するために、一六世紀末から一七世紀の最初の一〇年代にかけて王領地管理について全面的な再検討が行われ⁽⁶³⁾、王領地収入増加のために新たに次の政策が打ち出されることになった。すなわち、第一に、保有者の権利を点検し、疑わしき者に高額の示談金を課し、従来よりも高額の地代をもって再保有させること、第二に、王領地の分割貸出、第三に、さらに進んで王領地の売却である。第一の政策は特にジェイムズ一世治下において積極的に実施され、⁽⁶⁴⁾ その過程で各地に保有者との間に紛争を生じたが、⁽⁶⁵⁾ 全体としてどの程度の成果をおさめたかは疑問である。結局、絶対王制はその財政的困窮がつのとともに、第二、第三の道を選ばざるをえなかった。すでにヘンリー八世のとき没収修

道院領のほぼ三分の二が売却されたといわれるが、王領地の大量的売却はエリザベス女王、ジェイムズ一世、チャールズ一世の時代をつうじて行われ、市民革命までに全王領地の半分以上が売却されたと推定される。⁸³⁾ それにもかかわらず王領地がなお最大の封建領地であったことはたしかである。

3 御料林管理制度

イングランドではドゥムズデイ時代から広大な森林地が王領地に属し、王領の森林地は御料林 Forest と称されて特別の扱いを受けていた。法律的にいえば、御料林とは国王に専属する狩猟地であり、御料林法 Forest Law の適用を受ける地域であって、そこでは国王のみが狩猟権を有し、住民は共同権しかもたなかった。⁸⁴⁾ 御料林はもともと国王がスポーツを楽しむための領地であって、王領地収入という点では比重が小さかったが、豊富な天然資源を有し、その開発が進むとともに経済的にも重要な意味を持つようになった。⁸⁵⁾ サセックス王領地の調査の中には、アッシュダウン御料林 Ashdown Forest の調査が含まれているが、それは特に詳細なものであり、以下の分析においても相当のペーシがさかれるので、御料林管理制度の概要を示しておくことが適当であろう。

御料林は一つの上級裁判所、すなわち、the Court of Justice Seat、および、二つの下級裁判所、すなわち、the Court of Swainmote と the Court of Woodnote, or the Court of Attachment によって管理された。⁸⁶⁾ 上級裁判所は御料林巡察判事 Justice in Eyre of the Forests によって主催され、二つの下級裁判所から上申された犯罪の審理御料林法の適用・実施にかかわる訴訟などの処理に当り、三年に一度開かれた。⁸⁷⁾ 下級裁判所は主として御料林法にたいする違反の摘発、差押を行うものであり、the Court of Swainmote は四ヶ月に一度、the Court of Woodnote は四〇日に一度開かれた。⁸⁸⁾ さらに、それぞれの御料林においては、次のように、特別の役人が任命されて、その管理に当たっていた。⁸⁹⁾ (1) 御料林長官 Verderers——管理の最高責任者⁹⁰⁾、the Court of Swainmote の判事をつとめる。(2) 御

料林調査官 *regarders*——三年に一度、御料林の査察ないしは調査、および、開墾地 *assarts and purprestures* に關連して申立てられた犯罪の調査に當る。(3)狩獵地管理人 *Foresters*——鹿の棲息する茂み *vett* と鹿を維持し、犯罪者を *the Court of Woodnote* へ出頭させる役割をもつ。(4)家畜管理人 *agisters*——御料林内の家畜の放牧權 *agistment or pasturage* の管理を任務とする。(5)立木管理人 *woodward*——立木、下生の保存を任務とする。(6)その他にも、領地の管理に必要な事務一般を処理するために、所領代官 *steward* その他の役人が任命されていた。他方、御料林からの収入は一般の王領地収入とほぼ同じ手続で処理されたので、ここに繰り返す必要はない。ともかく、御料林が王領地の中でも特に厳しく規制されたことはたしかであろう。

とはいえ、全体としてみれば、御料林管理のあり方も一般の王領地管理のあり方とほぼ同じ方向をたどっていた。すでにのべた一六〇〇年代における王領地管理の再検討の中で、絶対王制の御料林管理政策も変更をせまられることになった。そして、ここでも他の王領地の場合と同じ政策が行われた。すなわち、(1)御料林内の保有者の保有權を点検し、高額の保有承認料を課し、かつ、地代の引上をはかること、第二に、御料林の貸出、第三に、御料林の売却である。

まず、第一の場合についていうと、御料林への不法な侵入は御料林法に違反するものであり、嚴重に取締られたけれども、それは狩獵以外の一切の用途を禁止するというほどの嚴格なものではなく、御料林内の開墾地 *assart and purpresture* は一定の料料と年地代を支払うことを条件に保有を承認されていた。⁸⁰⁾ だが、実際には、こうした合法的な保有地とともに、御料林内の非合法な開墾 *encroachment* がたえず行われていたのであり、特に、ヘンリー八世の死後、御料林法が緩和されたことよってさらにこの傾向が促進された。⁸¹⁾ けれども、王室財政の窮乏に直面した絶対王制がすべての可能な収入源を探し求める政策がとられるにおよんで、御料林にも注意が払われることになり、ジェ

ームズ一世治世の初から、開墾地の保有者にたいして示談金を課するという措置がとられた。さらに、一六〇五年五月一二日の布告によって同年十月一日までに示談金を支払わない土地はすべて没収され、別途に貸出されることになった。⁽³³⁾そして、ジェームズ一世の即位後五年のうちに盗用地処分のために六つの委員会が設置されたが、右の政策はジェームズの治世中続けられた。その過程において保有者の権利は厳しく点検されたが、実際問題として合法、非合法の区別は曖昧であり、従来の慣習保有農さえも影響を受けることとなり、結局、多数の保有者は保有地の安全を脅され、高価な訴訟と追放の危険に直面して、示談金を支払い、地代の引上に応じざるをえなくなった。⁽³⁴⁾さらに、御料林に収入を求める政策は御料林の境界を拡大せんとする政策にまで発展した。⁽³⁵⁾

しかしながら、御料林から収入をえるもつと手取り早い方法は御料林の貸出、および売却である。こうした政策はチャールズ一世の時代に入って特に積極的に遂行され、次々と重要な御料林が売却あるいは貸出されていった。⁽³⁶⁾ところが、一六三〇年代なかごろになって御料林政策に変更があり、チャールズ一世は御料林の分割と販売を停止し、ジェームズ一世にならって御料林の境界を拡大しようとした。⁽³⁷⁾だが、このときにはすでに多くの御料林が国王の手を離れているのであり、御料林管理制度がもはや統一を欠いていたことは明らかである。

*

*

*

以上の概観からの結論は、要するに、当面の時期においてはもはや王領地管理の統一性が失われ、できるだけ多くの収入を王領地から上げようという絶対王制の政策が失敗に帰したということである。それは、一般的にいえば、ブルジョアの発展の進行のもとで巨大封建所領の統一的経営が困難に陥っていたこと、絶対王制の官僚機構によって支えられていた王領地経営の場合には特にそうであったこと、ひいてはまた、絶対王制の支配機構そのものが弱体化していたことを示している。そこで、このような状況の中で弱体化しつつある封建的土地所有をブルジョア的に改造す

る新しい方向が発展しつつあることが、当然、予想される。しかし、それはそれぞれの地域の条件によって特有の地域的形態をもって現われるものである。それゆえ、それぞれの地域の状況をできるかぎり明らかにした上で、一般的な方向を見定めることが重要と思われるのである。

註 (1) Madge, *op. cit.* pp. 22~23.

(2) *Ibid.*, pp. 23~24.

(3) *Ibid.*, pp. 24~25.

(4) *Ibid.*, p. 33.

(5) *Ibid.*, p. 34.

(6) *Ibid.*, p. 34.

(7) *Ibid.*, p. 34.

(8) *Ibid.*, p. 35.

(9) *Ibid.*, p. 35.

(10) *Ibid.*, p. 36.

(11) *Ibid.*, p. 36.

(12) *Ibid.*, p. 37.

(13) この年には、初収入裁判所 the Court of First Fruits and Tenths が設立された。これは、ヘンリー八世による宗教改革の結果、従来ローマ法王に納められていた初収入税 First Fruits と十分の一税 Tenths が国教会の首長たるイギリス国王に帰属することになったので、それらの収入の取扱に当るものである。それは、前記諸裁判所の設立とともに、イギリス絶対王制の支配機構整備のための諸々の措置の一環としての意味をもつので、付記しておく。なお、この裁判所をも含めた前記諸裁判所の成立過程ならびにそれぞれの構成と機能については、富岡次郎『イギリス農民一揆の研究』（昭和四〇年、創文社）第四章「イギリス絶対主義と修道院解散」に詳細に分析されている。

(14) 後見裁判所設立の意義については、武「前掲論文」一九三二〇〇ページ参照。

(15) Madge, *op. cit.*, pp. 37~38.

(16) すなわち一六〇二年、Sir Robert Johnson は国務大臣 Sir Robert Cecil あての意見書の中で王領地管理の凶散さを指摘し、

特に、調査記録 Surveys の整備されていないことが国王に損失をもたらしているとして、徹底した調査を行なうよう提言し

つくる (Madge, *op. cit.*, pp. 51~53)。²⁰ この提言は王領地管理政策の一方を示すものであり、実行に移されることになった。実際、一六〇八年には John Hey などの委員は二一州における三〇〇の王領マナーの調査結果を Cecil に報告している (G. H. Tupling, *The Economic History of Rosendale*, 1927, pp. 137~138, 138 n. 1)。

²⁰ もともと、エリザベス女王のときには膳本保有地を定期借地に切りかえ、地代を引き上げる政策が部分的になされたこともある。例えば、一五六二年、Denbighshire の Bromfield v Yale の膳本保有農はその膳本を返還し、地代の増加と四〇〜五〇年の定期借地で保有することに応じるよう強制された (Tupling, *op. cit.*, p. 141)。²¹ また、ノーサンプトンシャーの Gratton と Hartwell では一六世紀後半から一七世紀初めにかけて慣習保有地の比率がいちじるしく減少している (Lenard, *op. cit.*, p. 81)。²² しかし、これらはむしろ例外的な現象であろう。

²¹ 一六〇八〜一六〇九年の一年間に、瑕疵ある保有者に課せられた示談金は九、〇〇〇ポンドにのぼったといわれる (Tupling, *op. cit.*, p. 141, n. 1)。²²

²² Tupling, *op. cit.*, p. 152.

²³ 富岡『前掲書』二七五〜二七七ページ参照。

²⁴ Forest が一定量の森林地を含んでいることはたしかであり、そのことから Forest なる言葉が森林地を意味するようになったといわれるが (Cox, *Royal Forest of England*, pp. 1~2)、『御料林は必ずしも固有の森林地のみならず、さまざまな種類の土地を含み、かつ、かなり初期の時代から一定の条件のもとに御料林内の土地を開墾、耕作し、これを保有することが認められており、時代を下るとともに御料林内の慣習保有地は徐々に増大し、御料林は農地に転化していった。さらに、一六世紀後半から一七世紀にかけての御料林の貸出し、売却はさらに御料林の農地化を促進した。しかも、イングランドの土地の中で、御料林と獵園 Park はかなりの比重をしめていたのであり、その農地化の過程は、イギリス農業の発展史上、特殊な地位をしめるものといえよう。』

²⁵ Madge, *op. cit.*, p. 31.

²⁶ *Ibid.*, p. 25.

²⁷ *Ibid.*, pp. 25~26.

²⁸ ²⁹ *Ibid.*, p. 26, Tupling, *op. cit.*, pp. 6~15. これらの役職の名称、役人数、任務の分担などは時と地域によって異なっ

一七世紀中葉のサセックス王領地における支配構造 (武)

ているが、要するに大同小異であろう。

⁸⁰ Sir. Robert Johnson は前述の二六〇二年の意見書の中で御料林にもふれ、さらに、一六二一年には御料林の収入を増大すべくプランを示している (Madge, *op. cit.*, pp. 51~52.)。

⁸¹ Tupling, *op. cit.*, p. 138.

⁸² ⁸³ ⁸⁴ *Ibid.*, p. 139.

⁸⁵ *Ibid.*, pp. 140~141.

⁸⁶ *Ibid.*, p. 141, n. 3.

⁸⁷ С. И. Архангельский, Крестьянские Движения в Англии в 40—50х годах XIX вв., М. 1960, стр. 72~73.

⁸⁸ Там же, стр. 142.

四 ランカスター公領に属する地域

サセックス州内のランカスター公領に属する領地は、国王から当該所領の執事 steward に任命されたドーシット伯の管理下に置かれており、それぞれの領地の管理に必要な下級の役人は前記ドーシット伯によって適宜任命されるという方式になっていた。このランカスター公領に属するアッシュダウン御料林と Duddleswell Manor および Pevensy Manor の調査記録は議会派によるサセックス王領地調査の中でも特に詳細であるので、まず、この地域から検討を始めることにする。

A アッシュダウン御料林 Ashdown Forest

アッシュダウン御料林は八つの教区にまたがる広大な御料林であり、一六五〇年の調査によれば、その面積は約一九九一エーカー、その価値は二、二五六ポンド一三シリング四ペンスと評価されている。⁸⁹ この御料林は、一三七二年、エドワード三世の子 John of Gaunt に下賜されてランカスター公領 Duchy of Lancaster の一部となり、Lancaster

Great Park と称されたが、後に公領に属する他の領地とともに国王に帰属し、王領地に編入された。⁽³⁾ Duddleswell Manor は前記の御料林内およびその周辺に保有地を有する王領マナーである。市民革命の時期に全イングランドの御料林に勃発した御料林内の共同権をめぐる農民闘争は、革命期の農民運動の一つのタイプを成すものであるが、アシュダウンは広大かつ典型的な御料林であるゆえに、その状態を明らかにすることは、市民革命期の御料林地域における農民闘争の意義を明らかにする上に一つの手がかりを与えることにもなるであろう。⁽⁴⁾

アシュダウン御料林と Duddleswell Manor にかんする第一回の調査は一六五〇年に（表一の②⑥）、第二回の調査は一六五六～八年に行われた（表一の⑩～⑭と⑲）⁽⁵⁾。表二は、前記二回の調査に現われた御料内の土地の区分と異なる種類の土地の面積その他の詳細を示すものである。これを大別すれば、この御料林内の土地は、(1) 国王のために留保され、幾つかの管区 *walke* に分かれたれ、管理人 *keeper* によって管理されている部分、(2) さまざまな階層の共同権者 *commoners* が共同権を有する部分、(3) Duddleswell Manor の慣習保有農の保有地、(4) 合法ないしは非法に囲い込まれて、事実上、私的利用に任されている土地に区別することができる。だが、全体としてみれば、国王に留保された部分と共同権の存在する部分が圧倒的に優勢であったといえよう。

1 御料林管理の状況

アシュダウン御料林ではかなり遅い時期まで伝統的な御料林管理機構が残されていたように思われる。一六五〇年の調査記録に現われたかぎりでは、ジェームズ一世第二二年（一六二五—二六年）六月二二日の特許状によって、ドーシット伯 Earle of Dorset がアシュダウン御料林の長官 *master of the Ashdown Forest*、ないしは狩猟長官 *Principal master of the game* に任命され、年額六ポンド一六シリング一〇ペンス半の知行を与えられ、さらに、御料林内の立木・下生 *wood, underwood, trees* の管理人 *keep*、調査官 *Surveyor* の諸役職を兼任していた。⁽⁶⁾ このドー

表2 Ashdown Forest の土地

地 名	時期	時 期 a. r. p.	年 価 l. s. d.	保 有・占 有 者
Dudleswell Lodge	1650 1658	30 19 1	15 10	R. Brook(保有・占有) 全 上
Dudleswell Walk	1650 1658	— 1203 3	— 234 8	—
Pippenford Lodge	1650 1658	24 0 2 21	12 8	Jh. Prank(保有・占有) 全 上
Pippenford Walke	1650 1658	— 704 2	— 100	—
Hineleape Lodge	1650 1658	30 24	13 6 8 4 16	Fr. Hesman 全 上
Hineleape Walke	1650 1657	— 341 1 0	— 59 2 4	—
Comdene Lodg e	1650 1658	16 15	8 5	J. Kingswood 占有 全 上
Comdene Walke	1650 1658	— 1040	— 95 6 8	—
Whitedeane Lodge	1650 1657	10 14	4 4	Jh. Palmer 占有 全 上
Whitedeane Walke	1650 1657	— 1843	— 14	—
Broadstone Lodge	1650 1658	16 50	12 12 6 8	Jh. Norman 全 上 未 亡 人
Broadstone Walke	1650 1658	— 1108	— 238 13 4	—
Warreu Lodge	1650 1658	100 90	35 20 4 5	R. Gibson 占有 全 上
Warren Walke	1650 1658	— 744 1	— 136 8	—
Old Lodge	1650 1658	12 9 2	6 2	H. Ford 占有 全 上 未 亡 人
common waste ground	1650 1658	— 744 1 0	—	—
Prestridge Bauk & Footbridge	1650 1658	— 417	— 73	—
Whitehouse	1650 1658	20 —	6 13 4 —	pool なるもの —
Commons to Commoners	1650 1658	— —	— —	— —
慣 習 保 有 地	1650 1658	424 467		
Open Common in Stone quarry	1658	20	4	
Buckhurst Parkからの囲込	1658	44	11	ドーシット伯とその 指定人
Newham Park からの囲込	1658	14	4 13 4	ドーシット伯とその 指定人占有
Newbridge lands in Bucksted	1650	9	5	全 上
Vachery lands	1650	100	25	D. Rogers, gent.

シット伯はサセックス州内におけるランカスター公領に属する王領地管理の最高責任者であり、アシュダウン御料林のみならず、公領に属する他の幾つかの地域の各種裁判所の代官 *Seward* にも任命され、前記の諸役職をも含めて、六ポンド一三シリリング四ペンスの知行を与えられた。⁽⁹⁾ それとともに、このドーシット伯には、前記の役職に関連して国王に帰属すべきすべての収入を支払う義務、ならびに、御料林内の番小屋 *lodges* その他の建築物および棚を修繕し維持する義務が課せられていた。⁽¹⁰⁾ こうした点からみて、ドーシット伯は大封建貴族 *nobility* の一員であると同時に、国王から多くの官職を与えられた典型的な官職ジェントリ *Court gentry* であり、御料林の日常の管理・運営はドーシット伯の任命した他の役人によってなされていたものと思われる。一六五〇年の記録に現われたかぎりでは、六人の管理人がそれぞれの管区の管理に当り、その代償として一定の知行と御料林内の共同放牧権が与えられていた。⁽¹¹⁾ ともかく、この段階では、いちおう伝統的な管理方式にしたがってアシュダウン御料林が管理されていたといえるよう。

ところが、チャールズ一世第九年（一六三四～三五年）七月八日付の特許状によれば、前記ドーシット伯はアシュダウン御料林の三管区内の裁判所およびハンドレド裁判所と *Swaimnole* 裁判所のすべての地代と収益を、向う三年間にわたって、毎年八ポンド一九シリリングの旧地代を支払うこと、かつ、毎年献上されてきた二頭の若牝牛 *Sticks* の代りに三六シリリングを支払うこと、前記の諸役職の知行を辞退することを条件に下賜されることになった。⁽¹²⁾ それとともに、ドーシット伯は、この御料林内に生育する下生と雑木、*new howse* なる家屋敷と二〇エーカーの圃地、養漁池、鍛冶場 *fforge*, *furnace* をやはり三一年間の期間で下賜され、森林地にたいしては年一六ポンド一三シリリング四ペンス、*new howse* にたいしては年四〇シリリングを支払うこととされた。⁽¹³⁾ 以上のことは、要するに、アシュダウン御料林の管理が貸与方式にきりかえられたことを意味する。

2 アシユダウン御料林の諸裁判所

アシユダウン御料林に關係ある裁判所は次のごとくである。

(1) バロン裁判所 Court Baron or three weeks Court この裁判所は、いうまでもなく、領主にたいする土地保有農民の封建的義務が十分に遂行されているか否かを監視するために開かれるごく普通の領主裁判所で、三週間に一回の割合で開かれることになっていた。その管轄は、この御料林だけでなく、ランカスター公領とペヴンシー・レイプ Rape of Pevensy の幾つかのハンドレンドにまたがっていた。

(2) Aves Court 又 Woodnote Court これらの法廷は御料林特有のものであり、Aves Court は万聖節（二月一日）の次の火曜日に開かれ、それから三週間後に Woodnote Court が開かれる。これらの法廷では、慣習の濫用、御料林への侵犯、獵獸や立木の毀損者についての証言がなされ、Duddleswell Manor の保有者、そのほか御料林内に慣習的權利 custom を有する者が出仕義務を負っていた。

(3) 州長官巡察裁判所 Sheriffs turn court これは復活祭から第七週目の木曜日に開かれ、アシユダウンのみならず幾つかのハンドレンドを管轄していた。各ハンドレンドの Alderman はそこへの出仕義務を負い、そこではすべての贈酬奉物 deodans、重罪人没収財産 felions goods、逃亡犯人およびその共犯者 fugitives, fellows of themselves などの件が証言され、所罰される。そして、前記の裁判所におけるすべての科料 (public annances, fines, amercants) はランカスター公領の代官 tuesday, Bailiff によって賦課され、勘定され、決済される。この裁判所は封建王政の初期の段階では重要な地位をしめ、徐々にその地位が低下してきただけであるが、当面の段階でもなお、絶対王制の支配機構の一環として一定の役割をはたしていたことがうかがわれる。

3 慣習保有農民の封建的義務と慣習的權利

御料林内の住民は前記の御料林管理機構に連なる役人と前記の諸裁判所の支配に服していたのだから、すでに土地保有農民の封建的義務の一端はのべられたことになるが、この点について一六五〇年と五六一五八年の調査記録が残っている Duddleswell Manor の場合をさらに検討してみよう。

Duddleswell Manor の保有者は、一六五〇年の記録では自由保有農民五人、贍本保有農民五四人であり、一六五八年の

記録では自由保有農六人、贍本保有農六一人であり、贍本保有農が圧倒的多数をしめている。贍本保有農の一エーカー当り平均地代額は一六五〇年の記録では二・三ペンス、一六五八年の記録では一・八ペンスである。一六五〇年の調査記録によれば、自由有農にたいしては相続料 relief として一年分の免役地代 quit rent に相当する金額の支払義務が課せられ、贍本保有農については保有許可料は定額ではなく、それぞれの保有地の一年分の価値以上の金額が徴収されるのが普通であったといわれる。さらに、自由保有農と贍本保有農の双方にたいして相続上納物 heriot (最上の家畜 the best beast) 献上の義務が課せられていた。したがって、贍本有農の場合には地代の低さは一時金によって或程度相殺されていたといえよう。

いずれにしても、一般に、王領地における土地保有農民の地代水準が低かったことは事実である。しかし、地代の高低の問題は重要であるにしても、それだけで土地保有農民の封建的負担の強弱を律しすることはできない。しかも特殊な環境の下にある Duddleswell Manor の場合は特にそうである。すなわち、このマナーの保有地は狭小であり土地保有農民の主たる生活基盤は御料林内の共同放牧権にあったのであり、この点について検討しなければならない。このマナーの慣習保有農は古来の慣習により御料林内にさまざまな権利ないしは便益を有していたが、同時にそれらの権利の行使に際しては厳しい規制を受け、多くの負担を課せられていた。その大要はほぼ次のごとくである。

- (1) Duddleswell Manor の自由保有農と慣習保有農および Maresfield Manor のすべての保有者は夏季にはいかなる家畜をも飼養しうる特権的な慣習、free custom を持ち、冬季には御料林内の慣習保有地で家畜を飼養できたが、その代りに毎年 Ave Count で去勢牛 bullock 一頭につき半ペニー、馬一頭につき一ペニーを支払い、ミカエル祭（九月二十九日）から聖マルティノ祭（十一月十一日）の間に御料林内に家畜を放牧する場合には、前記の金額の他に家畜一頭につき二ペンスを支払う義務を負っていた。
- (2) ランカスター公領に属し、御料林内に慣習を有する保有者は、一ドラフトの牡牛 draught of oxen を飼養した場合、御料林内に夏からミカエル祭までの期間、牝馬二頭と仔馬一頭を放牧することを許されたが、代りに二ペンスを支払わねばならなかった。

(3) Duddleswell と Maresfield の保有者は御料林内に豚放牧権 *pannage* を有するが、その代りに成長した去勢豚 *grow hogs* について二ペンス、仔豚一頭につき一ペニーを支払った。そして、彼らは一年のうち一定期間を除いて自分の育てた豚 *swine* を御料林内に放牧することを許されていた。しかし、放牧規制に違反して *Woodmote Court* で罰金を課せられた保有者は、彼らの慣習を保持するために毎年一才の去勢豚一頭につき二ペンス、半才以下の去勢豚につき一ペンス半を支払わねばならなかった。さらに、すべての保有者は *Aves Court* において彼らの飼養する牛、馬、豚の数を担当役人に間違なく申告しなければならなかった。

(4) 前記の共同放牧権の他に、御料林内に保有地を有する土地保有農民には一定の木材伐採権、泥灰土 *hate* 採取権、その他の権利が与えられていた。

当時の農民経営における共同放牧権の重要性は *Duddleswell Manor* の保有者に限ったことではないが、御料林内あるいはその周辺に狭小な保有地しか有しない *Duddleswell Manor* の保有者にとっては御料林内の共同放牧権は特に重要であり、彼らの主要な生活基盤を成していた。そして、先に示したように、御料林を管轄する各種の裁判所が厳重に放牧権を規制し、農民は放牧にかんする煩瑣な規制に反した場合はもとより、役らが慣習にもとづいて合法的に放牧を行う場合でも、一定の放牧料の支払を義務づけられていたのである。一六五〇年の調査によれば、アッシュダウン御料林からの収入は約八七ポンド一シリングと評価され、そのうち *Duddleswell Manor* の膳本保有地代は三ポンド四シリング六ペンスにすぎないが、家畜の放牧許可料 *Aves Rents, or pannage rents* は八ポンド一〇シリングであり、(*Duddleswell Manor* の保有者その他の保有者を含む)、バロン裁判所、*Woodmote Court*, *Aveshould court* などの各種裁判所からの収入は四一ポンド一三シリング四ペンスとほぼ半額をしめている。それは、アッシュダウン御料林を管轄する各種裁判所が当面の時期においても一定の役割を果し、農民生活を規制していたことを示している。

註 (1) *S. A. C.*, Vol. XXIII, p. 295.

(2) アッシュダウン御料林の歴史については *E. Turner, Ashdown Forest, or Lancaster Great Park, S. A. C., Vol. XIV, pp. 35* 参照。

(3) 市民革命期に御料林内の共同権をめぐって生じた農民闘争については、C. И. Архангельский, *Крестьянские Движения в Англии в 40—50-х годах XVII в.*, M. 1960, cp. 64—141, 267—280 参照。アルハンゲリスキーは前記の研究の中でこの農民闘争の具体的な経過を詳細に示しているが、闘争の生じた御料林の社会・経済構造の分析は十分になされておらず、したがって、闘争の意義もはっきりしていないように思われる。アッシュダウン御料林は、とにかくにも、革命のときまで国王の手に保留されていたから、革命期には大きな闘争が発生せず、紛争はむしろ革命ののち一七世紀六〇年代以降の囲込をめぐって生じた。この点については E. Straker, *Ashdown Forest and Its Inclosures*, S. A. C., Vol. 81, pp. 121—139 を参照。

(4) 一六五〇年の調査記録は S. A. C., Vol. XIII, pp. 294—313, 一六五六年のそれは S. A. C., Vol. XXIII, pp. 242—271, Vol. XXIV, pp. 189—218 に収録。

(5) (6) S. A. C., Vol. XXIII, p. 302.

(8) これら六人の管理人はそれぞれの管区における番小屋と付属する囲地を占有し、御料林内に二〇〇頭の牛、二〇頭の馬の放牧権を与えられ、かつ、年六ポンド一三シリング四ペンスの知行を受けていたが、調査官にたいしてその権限を立証することができなかった (S. A. C., Vol. XXIII, pp. 303—304)。このほかの役人としては Mr. T. Wood なる者が一六四七年のドーシート伯からの代理委任によつてバウンシー・レイプ内のランカスター公領の代官 *feodary and bailiff* であると称しているが、この代理委任は調査官によつて無効と認められた (S. A. C., Vol. XXIII, p. 304)。また、一六五〇年の調査官の覚え書によれば、御料林監守 *the ranger* の Sr. H. Cumpson なる者が約一〇年来御料林内にある *chamberlain's house* の大きな部分を破壊し売却したとある (S. A. C., Vol. XXIII, p. 312)。これらのことは、御料林の管理が乱れを起していたことを示している。

(9) S. A. C., Vol. XXIII, p. 302.

(10) *Ibid.*, p. 303.

(11) (12) *Ibid.*, pp. 309—310.

(13) (14) *Ibid.*, p. 310. *ave* はサセックスの古語で *reckoning or account* を意味する (S. A. C., Vol. XXIII, p. 294, n. 94.)。おざらへ、この裁判所で共同権者の放牧する家畜の数を確認し、放牧料を徴取したところから、かかる名称を有するこ

とになったのであろう。Woodnote は御料林に一般にみられる機関である。

(15) この裁判所の構成については S. A. C., Vol. XXIII, p. 310 を参照。

(16) (17) S. A. C., Vol. XXII, p. 310.

(18) この点については、フラクネット『イギリス法制史』上（東京大学出版会、一九五九年刊）一六二—一七〇ページ参照。

(19) (20) S. A. C., Vol. XXIII, p. 310.

(21) (22) *Ibid.*, p. 311.

(23) 一六五八年の調査記録によれば、御料林内で共同権者に割当てられた面積は約四、四五二エーカー、放牧を許された家畜 (cattle) 数は二、七四六頭、共同権を有する者は二、二四人である。それゆえに、Duddleswell Manor のみならず周辺諸マナーの保有者、その他さまざまな階層の人々が共同権を有していたことが明らかである。右の数字だけでも、御料林内の共同権の重要性、共同権を基盤とする牧畜経営の発展、御料林内における錯綜した権利関係、そしてまた、こうしたことを背景にして共同権をめぐる紛争が生じる可能性があったことが容易に推察できよう。これらの点については、別稿で問題にする。

(24) S. A. C., Vol. XXIII, pp. 294—295.

B Pevensey Manor

Pevensey Manor はランカスター公領に属するマナーの一つとして前記ドーシット伯の支配を受けていたが、一六四九年の調査官の覚え書によれば、Mr. Edward Raynes なる者がドーシット伯の代理委任状によつて Pevensey Manor のバロン裁判所の執事 Steward となり、また、マナーの保有者からの忠誠金 fealty の徴収、土地譲渡の記録等の任務を遂行していた。バロン裁判所は毎年八月ないしは九月に開かれ、そこで相続上納物（最上の家畜）と相続料の支払が行われており、相続料からの収入は年一〇ポンドであり、このほかに前記裁判所の臨時利得 perquisit（おそらく、諸種の科料であろう）として四シリング六ペンスが記録されていた。⁽²⁵⁾さらに、アシュダウン御料林と同じように、この地域も州長官巡察裁判所の管轄下にあったことはすでにのべたとおりである。領主裁判機構の活動につい

て記録で確かめられたのは以上の程度にとどまるが、ともかく、領主裁判所が当面の時期においても一定の規制力を持っていたことは推察できよう。

次に、土地保有農民の権利・義務について検討しよう。このマナーの土地構成を大づかみにいうと、旧本領地部分は約五四四エーカーであり、この部分は後にのべるように分割借地されているが、農民保有地は二、五二八エーカー余であって、全マナーの土地のうち圧倒的部分をしめている。⁽⁵⁾ 保有者は三つの範疇にわかれ、Portreeve tenants は四人（うち一三人は free portreeve tenants）で、一、四一〇 $\frac{1}{4}$ エーカーを保有し、free portreeve tenants は二七人で、一、一八エーカーを保有し、burgage tenants は二三人（うち六人は portreeve ならうしは free portreeve tenants）である。⁽⁴⁾ これら三つの範疇の保有者の権利・義務の内容はそれぞれ次のごとくである。

(1) Portreeve tenants Portreeve tenants は町役人 Portreeve の役職に選ばれ、一年間、領主の地代を徴収し、領主のために証人を喚問し、差押え・拘引・押収などの事務を行うために出仕する義務を負い、さらに、領主にたいして収支報告書を作成、提出する任務を課せられていた。一六四九年の調査記録はこのマナーの保有者の相統慣行について詳細に記録しているが、保有者の封建的義務については、先にのべたほかには相統上納物（最上の家畜）の献上義務を示しているだけである。⁽⁶⁾ 他方、Portreeve tenants は領主の許可なくしてその嗣子と結婚させ、土地を販売・譲渡しうる権利を有していた。⁽⁷⁾ それゆえ、彼らはマナーの封建的管理機構の中に組み込まれ、封建的支配を維持するために奉仕する義務を負っていたが、それと同時に土地保有にともなう他の封建的付帯義務からはかなり自由であったといえよう。

(2) free Portreeve tenants free Portreeve tenants は Portreeve の義務を負わず、相統料として一年分の地代に相当する金額を支払う義務がある以外は、Portreeve tenants の場合とほぼ同様である。⁽⁸⁾

(3) Burgage tenants Burgage tenants は前記二つの保有者よりもさらに自由であって、相統料、相統上納物、一時金の支払義務さえも負っていない。⁽⁹⁾

町役人としての奉仕義務 Portreeve service が Portreeve tenants にとって煩瑣であり、大きな負担であったこと

一七世紀中葉のサセックス王領地における支配構造（武）

はたしかであるが、全体としてみれば、このマナーの保有者は土地保有に関わる封建的負担からは相対的に自由であったといつてもよいであらう。

次に、旧本領地の状況をみよう。当面の時期においては旧日本領地部分は、約五四四エーカーでマナーの全面積の約一八%をしめるが、約一一五エーカーの大地片から四エーカー以下の零細地片にいたる三七地片に分割されて四人の上級借地人に保有され、そこからさらに転貸され、二七人の下級借地人によって占有されている。しかし、前記一四人の上級借地人のうち、Mr. Th. Threale of Downashe が約一七四エーカー、M. Aubert が約二二〇エーカー、J. Gyles と Mr. B. Scarlet が共同で約一一九エーカーをしめ、残り一〇人の借地人は全体で三〇エーカーを借地するにすぎなかった。そこで、これら三件の大口借地について、やや立ち入って検討してみよう。

(1) Th. Threale と M. Aubert の場合。Th. Threale は M. Aubert の借地をも含む三九五エーカー余について借地権を有することを調査官に申立てた。それによれば、前記の借地は一五九八年、エリザベス女王から Edward Ferrers に下賜され、一六〇八年、この Ferrers から J. Threale (前記 Th. Threale の父) に前記の土地の権利が譲渡され、それが前記の Th. Threale の手にいったん移ったのち、その手を離れて借地権が転々と移動したが、一六三二年、Mr M. Aubert 夫妻の手に移り、一六三七年、この Aubert 夫妻から前記 Th. Threale に借地権が与えられ、Threale が前記の借地にたいする権利を再び獲得したといふのである。Threale はその証拠として前記 Ferrers から J. Threale への譲渡証書および Aubert 夫妻との契約書を提示したが、一六五〇年の記録において借地人として現われていた Aubert の借地二二〇エーカー余については、その申立が認められなかった。

(2) J. Gyles と Mr. B. Scarlet の場合。Gyles と Scarlet の借地は、三地片のうち一一三エーカー余りの地片についてその権源が立証された。この地片は、一五六二年、エリザベス女王から Edward Ferrers に下賜され、一六〇八年、その権利は前記の Ferrers からドーシット伯と Sr. George Rivers に譲渡され、一六二九年、前記ドーシット伯と Rivers から Gyles および Scarlet に譲渡されたものであった。

以上の事例は、少なくともエリザベス女王の時代から Pevensy Manor の本領地が分割して借地に出されたこと

を示している。このことが明らかになれば、残りの借地について権利関係を点検する必要はない。ここでは、次のことを指摘すれば十分である。すなわち、議会派の調査官が個々の地片について権利関係を点検したところ、全三七地片の半数をこえる一九地片について借地人の権源が立証されなかった。それは、借地の転貸、あるいは借地権の購入・譲渡による借地権の移転によって現実の借地関係が錯綜をきわめていたことを示している。さらに、借地人が国王に支払う借地料 (reserved rent) は固定されていたのに対して、借地権の譲渡に際しては高額の権利金が支払われ、また、上級借地人は下級借地人から高額の又貸料を徴収していた。⁽⁶⁾ これらのことは、本領地の定期借地化という一見積極的な政策も、王領地の場合は図散であり、成果が少なかったことを示すものであろう。

全体としてみれば、Pevensey Manor では慣習保有地が優勢であり、しかも、慣習保有農の封建的義務と負担は相対的に軽微であり、封建的支配は弱体であったといえよう。

註 (1) S. A. C., Vol. XXIV, p. 267.

(2) *Ibid.*, p. 266.

(3) (4) Pevensey Manor の保有地と地代の記録は S. A. C., Vol. XXIV, pp. 253~266. に収録されており、それにもとづいて算定した。土地保有農民の分解の状況については別稿で扱う。

(5) (6) (7) S. A. C., Vol. XXIV, p. 248.

(8) *Ibid.*, p. 249.

(9) *Ibid.*, p. 250.

(10) 旧本領地の調査記録は S. A. C., Vol. XXIV, pp. 268~284 に収録されている。Pevensey Manor の調査では旧本領地の調査記録が特に詳細であり、それぞれの借地についてその権利関係が執拗に追求されたことがうかがわれる。なお、旧本領地の分割借地を基盤とする農業経営の発展については別稿で扱う。

(11) S. A. C., Vol. XXIV, pp. 274~276, S. A. C. Vol. XXV, pp. 24~26, 30~31.

(12) S. A. C., Vol. XXV., pp. 31~35.

(13) *Ibid.*, Vol., XXIV., p. 276.

(15) 例えば、一六一五年 Thos. Threale は Cheeshouse land なる三〇エーカーの土地の借地権を John Waller に、一〇〇ポンドの権利金をとって譲渡し、一六一八年、前記 Waller は三〇〇ポンドの権利金をとって前記地片の借地権を John Cole に譲渡し、Cole はさらにこの地片を W. Head に転貸している。三〇エーカーの地片の借地権の譲渡に際してかかる高額の権利金が支払われたことは、この地片が良好な放牧地であったことを考えに入れても、不思議に思われるが、いすれにしても、上級借地人が大きな利得をえていたことを示すものであろう。

(16) 例えば、前述の Th. Threale の三九五エーカーの借地にたいする権利主張において、これらの借地にたいする国王への地代 reserved rent は一六ポンド五シリング八ペンスであった。Threale は前記の借地のうち約一〇五エーカーの五地片を、一六一九年、年借地料六五ポンドで John Jeffery に転貸している。前記三九五エーカーのすべての地片について国王への地代と転賃料の額が明らかではないが、上の基準で考えれば、転賃料はもとの地代の一五〜一六倍に達し上級借地人が大きな利得をえていたことは明らかである。

なお、一六二二年、前記の Jeffery の妻 Jane は前記一〇五エーカーの借地権を三二ポンドの権利金で R. Rogers に売却、譲渡し、又借権の売却の事例を示している。

C Endlewick, Manor

Endlewick は、一三七二年、エドワード三世からその子 John of Gaunt に下賜されてランカスター公領となった領地の一つである。⁽¹⁾ そのときの記録によれば、それは、他の二四のマナー、農場とともに「Endlewick の管区 (Parish)」に包含されており、⁽²⁾ これらの領地はもともとまとまった領地であって、一括して管理されてきたものと思われる。だが、一六五二年の王領地調査記録には前記の領地の中で Endlewick しか現われておらず、他の領地はすでに王領地から脱落したことを示している。

次に、右の調査記録に現われた Endlewick Manor からの収入は表三のとおりであるが、これについては若干の説

表3 Endlewick Manor の収入

収 入 内 約	£	s.	d.	備 考
Endlewick rents なる地代	24.	10.	11	Endlewick なる土地の保有者たる Col. A. Staple と H. Shelley Esq. が徴収し領主に支払う。
Sheriffes yeald alderman fine	4.	19.	7	
Endlewick Manor の世襲領地代 (fee farm rent)	8.	9.	—	
Three Weeks Court からの収益	6.	6.	8	5 ハンドレッドを管轄、ドーシト伯の代理委任により、E. Raines, g. が主催。
法廷出仕免除金 (Suit of Court Money)	—	13.	6	
州長官巡察裁判所からの収益	2.	4.	4	
合 計	46.	14.	0	

S. A. C., Vol. XXIV., pp. 221~223 より作成。

明が必要であろう。まず、収入のうちでもっとも大きな部分をしめる Endlewick rents なる地代は、Endlewick なる地片の所有者に他の マナー、農場の所有者が支払う地代であり、それぞれの所有者の支払額は二シリングから七ポンドまでさまざまである。⁽³⁾ その由来は明らかではないが、これらの地域がランカスター公領となる前から存在しており、⁽⁴⁾ 当面の時点にいたっているものである。法廷出仕免除金 Suit of Court Money は後述する three weeks court への出仕義務を負う裁判官 free sutor がこの裁判所への出仕義務を免れるために支払う科料である。⁽⁵⁾ 記録によれば、三人の knight 一人の Esquire 一人のマナー領主が二・五シリングの科料を支払い、Henworth なる土地の保有者ないしは所有者が一・二ペンスの科料を支払って、出仕義務を免れている。⁽⁶⁾ 州長官巡視裁判所はランカスター公領の他の地域とともにこの領地を管轄していたが、領主刑事裁判所が見あたらないのはその裁判権ならびにすでに収入が譲渡されてしまっていたからである。⁽⁷⁾ さらに、three weeks court および州長官巡視裁判所の執事はドーシット伯の代理委任によって Edward Raines Gent. がつとめていた⁽⁸⁾ことも公領内の他の領地の場合と同じである。

註 (1) ランカスター公領に属する領地としては、他に East Grinstead と Helsham が調査記録の中に見受けられる。前者は一屋敷

と三地区（一九エーカー）の記録であり、後者の記録では Helsham の都市部の店舗、家屋を主体とする物件がドーシット伯に

たいして下賜されたことが示されている。いずれも、簡単な記録であり、大した問題も見いだされなかったので、省略した。
(2) S. A. C., Vol. XXIV, pp. 219 ~ 220, Vol. XIV, pp. 263 ~ 264. bailiwick は州長官の権力から独立した行政権をもつ管

区であり、その代官 bailiff は公領の領主によって任命されていた。調査の当時、その管理権はドーシット伯に貸与されてい

た (S. A. C., Vol., XXV, p. 28)。

(3) (4) S. A. C., Vol. XXIV, p. 219.

(5) Ibid., p. 221.

(6) Ibid., p. 222.

(7) Ibid., pp. 218 ~ 219.

(8) Ibid., p. 222.

H Ashley Mills, Cheseworth Park, Colstaple, Horsham 及び Sedgwick Park

これらの地区はすべて Horsham 教区にあって相互に隣接し、周囲を Cheseworth & Sedgwick Manor の慣習保有地がとりまいている。そして、これらの領地はすべて、一六〇二年、エリザベス女王からの特許状によって Sir John Carrill of Haring に六〇年間の期間で一括貸与され、その権利はチャールズ一世のとき息子の John Carrill に相続されて、当面の時期にいたっている。

まず、表四は前記の一括貸与の具体的内容を示すものである。それによって次のことが明らかである。

(1) 財務府に慣習地代を納入するという手続、所領執事その他の役人による領地の巡視が行われている点からみて、これらの領地はもとも旧方式によって管理されたのであり、一括貸与に出されてのちも、古い王領地管理機構の残滓を残していたように思

表 4 John Carrill にたいする一括貸与の摘要

地 域	貸 与 の 内 容	国王への地代(reserved rent)	下級借地人から Carrill への地代	Carrill の義務
Ashley Mills	水車と 35 a の放牧地	£ 6 13s. 4d.	£ 20	家屋、水車の修繕・維持
Cheseworth	①Cheseworthの capital mansion ②すべての旧獵園、それに付属するあらゆる権利と付属物。 ③Cheseworthに付属するすべての採草地、放牧地、家屋敷と耕地、立木、水路、漁業権及びすべての便益。 ④Cheseworth Lodgeと付属する放牧地、そこに生育するすべての立木と下生。 ⑤法廷収益、その他国王の領主権にもとづく諸種の封建的支払および大木と建築材用の立木、重罪人没収財産等を除く。	£ 54 12s. 2d.	£ 135 10s. (又貸面積 312 a 3r 19p)	①すべての建築物、棚の修繕、維持。 ②Cheseworth と Sedgwick のマナーの自由保有地代、慣習保有地代の徴収と財務府への納入。 ③年に 2 日、所領執事、調査官、その従者に飲食宿泊の便をはかり、かつ、その乗馬に飼料を与えること。
Colstaple	Colstaple なる 100 a の土地、保有地、採草地、放牧地、すべての立木と下生（大木と建築材用の立木を除く）。	£ 10 10s. (貸与の際一時金 £ 400 を支払う)	£ 46 (又貸の際かなりの額の一時金を支払う)	すべての建築物と棚の修理
Sedgwick	①Sedgwick旧獵園。 ②石材採取権、採草地、放牧地、家屋敷と耕地、森林地、水路、漁業権、およびすべての便益。 ③Sedgwick Lodge とすべての下生。 ④留保条項は、Cheseworth の場合とほぼ同一。	£ 55 5s.	£ 289 10s. (又貸面積 1,033 a 25p)	Cheseworth の場合とほぼ同一

注 S. A. C., Vol., XXIII., pp. 273, 286, Vol. XXIV., pp. 230, 232—33, Vol., XXV., pp. 51~52 より作成。

われる。

(2) 一括借地人たる Carill は、地代徴収義務そのほかの領地管理義務を負い、所領執事その他の役人の任務に協力しなければならない点で、なお王領地管理機構の一端に連なるものであった。

(3) しかしながら、前記 Carill は領地をかなり大巾に利用する権限を与えられ、前記の領地を細分して又貸に出し、高額の又賃料を徴収していた。こうして、彼はこれらの領地における事実上の領主として現われていた。

結局、一括貸与に際しても、旧管理方式の制約がまったく除かれたわけではないが、それにもかかわらず、一括借地人によって定期借地が導入され、定期借地経営の発展する条件が与えられたといえることができる。

慣習保有農民についていうと、この地域ではもともと土地の大きな部分が獵園として保留されており、慣習保有地の発展が制約されていた。慣習保有地の面積は明らかでないが、一六五〇年の土地台帳によれば約六〇〇エーカー前後と推定され、Carill によって又貸されている旧獵園の四割前後である。慣習保有農民についての権利・義務の詳細は明らかではないが、一六五〇年の調査官の覚え書によれば、パロン裁判所が毎年 Cheseworth の荘館で「領主の意志のままに」開かれることになっているのに、一六二三年以来まったく開かれておらず、忠誠 Royalty と特権 privilege という点でも法廷収入という点でも領主にとってきわめて有害であるとのべられており、封建的支配機構が弛緩しつつあることがわずかに推察されるだけである。

しかしながら、右のことはそのまま農民経営の発展につながるものではない。御料林と獵園の開放 disafforestation and disparking、そして貸出の政策は、すでにみたように、チューダー王朝末期から初期 Stuart 朝にかけての王領地管理政策の一つのタイプを成すものであったが、ここで問題にしている地域はこれに該当するものである。そして、これらの地域の大きな部分を成していた旧獵園が一括借地人によって細分・又貸されたことは、定期借地経営が大きな比重をしめるにいたったことを示すものである。これらの地域における王領地管理政策、すなわち、旧獵園

の開放とその一括貸与の結果は、定期借地の導入によって農民的土地保有の発展が妨げられたことであつた。

註 (1) S. A. C., Vol. XXIII, pp. 273, 286, Vol. XXIV, pp. 230, 232~233, Vol. XXV, pp. 51~52.

- (2) これらの領地は、一五四六年の第三代ノーフォーク侯 Thomas の領地の一部であつた(前記 Thomas の領地は St. Leonard Forest、六つの獵園および Barony, borough, Manor なを単位とする一四の領地からなる)。ところが、このノーフォーク侯の公権喪失によりその領地は国王に没収され、一五四七年、Thomas Lord Seymour に下賜されたが、その後 Seymour が投獄されたため、再びこれらの領地は没収され王領地となつた。後の没収の際に作成された Seymour の領地の遺産目録によると、Cheseworth Park には牛四頭、馬一頭、鹿一〇〇頭、Sedgwick Park には豚一〇頭、鹿一〇〇頭が数えられる。また、Cheseworth には Henry fayce なる者が当地の管理人として年六ポンド、シリングハペンスの知行を受け、かつ、当地の下役人 under-steward として四〇シリングの知行を受けていた。Sedgwick Park では Wylliam Barwyke なる者が管理人として年四ポンド、一シリング三ペンスを受けていた(以上は Sir H. Ellis, Inventory of Goods, &c., in the Manor of Cheseworth, Sedgwick, etc., S. A. C., Vol. XIII, pp. 119~131, 249)。今なぐん一六世紀の中葉まで、Cheseworth Park と Sedgwick Park は獵園として保留され、獵園の開放は、王領地の貸出と機を一にするものと思われ、Carrill にたいする一括貸与にともなう定期借地の導入が古い領主経済を掃しつつあつたことは明らかである。
- (3) 一六五〇年の Cheseworth と Sedgwick のマナー土地台帳は各保有地について地代額だけしか記録していない場合が多いが、保有面積と地代額の両方が記録されている場合の平均地代額は二ペンスであり、一応これを基準に計算すると、全保有地面積は六〇〇エーカー前後となる。保有地と地代に関する記録は S. A. C., Vol. XXIII, pp. 287~292 に収録されている。
- (4) S. A. C., Vol. XXIII, p. 291.
- (5) 獵園の開放とその定期借地化は王領地のみならず一般の封建領主のとつた政策でもあつた。例えば、サセックスの Petworth Manor ではすでに一六世紀の後半から獵園の開放と貸出の過程が進行し、一七世紀には旧獵園の大部分が農地に転化していた (Leconfield, Petworth Manor in the Seventeenth Century, pp. 50~66 参照)。

六 そ の 他 の 地 域

A ハンドレードないしはレイプを単位とするもの

一七世紀中葉のサセックス王領地における支配構造(武)

Aldwick Hundred をはじめとする八地域（表一の 1-9）にかんする調査はハンドレッドないしはレイブを一つの単位として行われている。これらの調査はいずれも、地代と法廷収入の額とその帰属、各種裁判所の状況について記録しているが、各ハンドレッド内のマナーないしはその領地の権利関係についてはまったくふれていない。したがって、これらの地域における王領地は国王からなんびとかに譲渡されていたものと思われる。

右の点を Aldwick Hundred の South Bersted 教区についてみると、この教区の四つのマナーは七世紀にサクソン王朝の王「Cedwall」からからカンタベリー大僧正に与えられ、一六世紀までその領地であったが、ヘンリー八世のとき王領地に編入されたものである。そして一六世紀末まで国王の代官によって管理されていたが、一五九八年、Reginald Pole に貸与された。⁽¹⁾ ちやうど Norden の “Survey” によれば、一六一七年ごろには、前記のハンドレッド内のすべての王領地は売払われていた。⁽²⁾ そして、前記ハンドレッドの住民にたいする領主裁判権⁽³⁾と Common fine⁽⁴⁾と称せられる支払のみ国王に留保され、当面の時期にいたったのである。他のハンドレッドについては詳細が明らかではないが、Aldwick Hundred の場合とまったく同様の調査様式であるところからみて、ほぼ同様の経過をたどったものとみて大過ないであろう。

前記の地域における地代ならびに法廷収入の帰属、各種裁判所の詳細にかんする摘要は表五のごとくである。それによって次のことが明らかである。

- (1) 領主裁判所についていうと、Court leets, three weeks Courts が定期的に開かれ、住民はそこへの出仕義務を負い、これらの裁判所が一定の拘束力をもっていたものと思われる。その他の封建的付帯義務の詳細は明らかでない。
- (2) 地代ならびに法廷収入は、Aldwick の地代についてのみ、州長官が徴収して財務府に納付するという古い方式をとっているが、他の地区ではすべて他の人物によって地代が徴収され、地代収入は徴収者に帰属した。また、地代徴収者は同時に領主裁判所を開催し、法廷収入を獲得した。⁽⁵⁾

表5 八地域における地代と法廷収入の帰属

地 区	Common fine なる地代	地代徴収者	地代の 帰属	法 廷	法廷収入	法廷開催責任者	法廷収入の帰属	権源
1 The Hundred of Aldwick	36s. 6d.	州 長 官	財務府	Court leets Three weeks Courts	£5. 13s. 4d.	Lord Craven Sr J. Carrol	全 左 全 左 但、裁判出仕 の怠慢料は 州長官が集め 財務府に。	
2 The Hundred of Bosham	52s. 6d.	Lady Barlet	全左	Court leets Law Day Three Weeks Courts	£6. 13s. 4d.	Lady Barlet	全左。全左人 はハンドレド 内のすべての 収益を獲得し ている。	不明
3 The Hundred of Buttinghill				Court leets	36s. 8d.	Lord Goring	全 左	不明
4 The Hundred of Kings Barns	£6. 13s. 4d.	Searl, Wid.	全左					不明
5 The Hundred of Manhood	1s. 9d.	Beauchamp	全左	Court leets Three Weeks Courts Law Day	£8. 6s. 8d.	Beauchamp	全 左	不明
6 Lewis Rape	£10. 9s. 9d. (aldermans fine を含む。*)	Lord Abergaven Earle of Arndell Earle of Dorset	全左が+ 全左+ 全左+	Court leets Three Weeks Courts	£14. 10s	地代の場合に 同じ	全 左	不明
7 Hundred of Steninge	£26. 6s. 8d. (aldermans fine を含む。)	Earle of Arndell	全左	Court leets Three Weeks Courts	£26. 6s. 8d.	Earle of Arndell	全 左	不明
8 Hundred of Tipnocke	15s. 9d.	Colonel Down	全左		£5. 6s. 8d.	Colonel Down	全 左	不明

*aldermans fine は1教区につき2s. 6d. と定められ、上記のうち6, 7の地区にのみみられる。

S. A. C., Vol. XXIII., pp. 225~242 より作成。

(3) 前記の地代・法廷収入の徴収者はいずれも、調査官にたいしてその権源を立証することができなかった。⁽⁶⁾だが、少なくとも州長官による管理という方式をとってない以上、おそらく、メアリー女王以後の時期に財務長官の任命する委員によって管理する方式が採用され、そのうちに、それぞれの委員が代理を任命し、あるいは、委員またはその代理が彼らの役職とそれに付帯する収益を売却・譲渡・貸与したことによって権利関係が錯綜し、だれが真の権源をもつものであるか不明確になってしまったものと推察される。⁽⁷⁾

こうしたことは、これらの地域においても王領地の管理機構が乱脈になっていたことを示すものといえよう。とはいえ、表に掲げられた人々によって領主裁判所が開催され、一定の収益が彼らに帰属し、住民が彼らの支配に服せしめられていたことも事実である。封建的支配は動揺しながらも、なお残存していたといわねばならない。

B マナーを単位とするもの

残された地域を大別すると、なお一つのマナーとしてまとまった形を残している場合と、多かれ少なかれ、断片的な地片の定期借地である場合の二つにわかれるので、まず、前の場合について検討する。

(i) Sharendon Manor

Sharendon Manor では、自由保有農は一四人で五六〇 $\frac{1}{2}$ エーカーを保有し、贍本保有農は五人（うち二人は自由保有地を保有）で五一エーカーを保有するが、一エーカー当りの平均地代額は自由保有地では約一・九ペンス、贍本保有地では五・五ペンスであり、絶対額としてはともかく、他の地域にくらべて割高である。⁽⁸⁾このほか、自由保有農にたいしては一年分の地代に相当する額の相統料、贍本保有農にたいしては「恣意的な保有許可料」⁽⁹⁾（ふつう保有地の価値の一（二年分）の支払義務、すべての保有者にたいして相統上納物（最上の家畜）の献上義務が課せられていた。⁽¹⁰⁾

領主裁判所については、バロン裁判所についてふれられているだけであるが、その開廷は「領主の意志のままに」行われ、その法廷収入は六ポンドと記録されている。⁽¹¹⁾マナーの規模からすれば、この額はかなり大きなものであり、

それはこのマナーでは領主裁判所が当時なお積極的に活動し、農民層を規制していたことを示すものであろう。さらに、地代・法廷収益は州長官が徴収し、財務府に納入する旧方式がとられていた。全体としてみれば、このマナーでは相対的に封建的支配機構が安定していたものといえることができる。

(iii) Old Shoreham Manor

Old Shoreham Manor の調査記録では、保有者の人数が示されていないが、自由保有地代は二・二ペンス、贍本保有地代は九シリングであり、贍本保有農の比率が高いことは明らかである。⁽¹³⁾ ここでは、保有者にたいして一年分の地代に相当する額の保有許可料と相続料の支払義務が課せられていた。⁽¹⁴⁾

領主裁判所についていうと、領主刑事裁判所とバロン裁判所が毎年九月二十九日に開かれたが、法廷収益は示されていない。さらに、調査官の覚え書によれば、これらの裁判所では Bailiff が選出され、選出された Bailiff は、一年間にわたって、これらの法廷の召集、所有者不明の物件と家畜 waif and Estrays の保管等の義務を負い、さらに、Bailiff に選出された者は次の年には会計役 Reeve に任命され、地代を徴収し領主に納入する義務を課せられた。⁽¹⁵⁾ こうした義務が負担であることはたしかであるが、その反面、このマナーの保有者は裁判への出仕義務、市場 fairs and Market への上場税 'Tow'、その他の州内義務を免ぜられていた。⁽¹⁶⁾

地代・法廷収益その他の封建的支払の帰属については、渡船料からの収入にたいする権利をアーンデル伯が主張しているだけであり、その他の詳細は明らかでない。だが、ベリーフなどの義務について特に記録されているところからみて、このマナーは伝統的な方式にしたがって管理されていたのであろう。

全体として、このマナーでは土地保有者のもとで封建的支配から相対的に自由であったといえよう。

C 定期借地に出されている場合

表6 定期借地の内容

地 域	貸与の内容	国王へ地代 (reserved rent)	権 利 関 係	備 考
Bexhill	①144 a の4地片 年価 £30.	£10. 2s.	n.d. ドーシト伯と Amer- rst, から E. Raines と T. Turpin に£40で借 地権を販売。 1631年, 前記 Raines と Turpin から, D. Hart of Walting に£120で 借地権を販売。 調査のとき, 前記 D. Hart の占有。	D. Hart の 権源立証さ れず。
	②3 a の地片, 年価 £4.			詳細不明
Beckley	Chantry lands なる71 a の6地 片, 年価 £41. 135s. 4d.		n. d. T. Bostock 夫妻に 1638年, 前記 Bostock か ら, T. Pettar of Bec- kley に貸出。 調査のとき, 前記 Pettar の占有。	Pettar の権 源立証され ず。
Iden	1 農家と7地片		調査のとき, N. Powell Esp. の指定人権利主張	詳細不明
Lagmersh	1 家屋と179 a 27 の18地片 年価 £46. 11s.		1580年, 国王から, W. Sackvil Esq. に80年間 下賜。 n. d. 前記 Sackvil から Olwin に譲渡。 調査のとき, 前記 Olwin の遺言執行人として Mrs Secunda Hook が 権利主張。	Mr. Secunda Hook の権 源立証され, 残り9年間 の借地を認 められる。
St. Leonard Forest	2 台の熔鋸炉 250荷の木炭 30コードの木 製鉄業経営のため の諸便宜	£36. 13s. 4d.	1602年, 国王から Jh. Carril に左記御料林を下 賜。前記 Carril から息 子の J. Carril に。 ただし, 左記御料林は途 中から, Cheseworth Manor とともに W. Collins, etc に渡り, 左 記の物件のみ Carril の 手に残った。	Carril の権 源認められ る。
South Mailing	4 a. 年価 £20.	12s. (ドー シト伯がう けとる)	R. Emerie of Cliff 1649 年付の謄本により権利 主張。	権源立証さ れず。

表6 定期借地の内容(続)

地 域	貸与の内容	国王への地代 (reserved rent)	権 利 関 係	備 考
South Mailing	3 a. 年価 £ 3.	?	1637年, ペンブルク伯, 40s. で Auccock に下賜。 n. d. Auccock, Blson に 貸出し。	権源立証さ れず。
Aldberry	マナーの遺跡と 64 a. 3 r. 年価 £ 42.	?	Sr. Wm. Morley, 権利 主張。	権源立証さ れず。
Ridgwick	15 a の 6 地片, 年価 £ 9.	?		詳細不明
Seabeech	マナーの遺跡と 75 a 2 r の 11 地 片年価 £ 30. 15s.	£ 20. 8s. 4d.	n. d. 国王から, Sr. R. Sa- ckevile に 99 年間下賜。 1552年, 供地権, W. Sa- ckevile に。 1557年, 供地権, R. Sa- ckevile に。 1596年, 供地権, W. Be- ynham と R. Sutton に。 1599年, 供地権, Jh. Morley に。	Morley の 権源立証さ れず。
Tortingt- on	家屋と 87 a. 年価 £ 80.	?	調査のとき, Th. Sowton, gent. の保有ないしは占有。	不 明
	納屋と 106 a の 耕地, 放牧地 年価 £ 70.	?	調査のとき, J. Pellett. の占有。	

S. A. C., Vol. XXIII., pp. 274—280, Vol. XXIV., pp. 233—247, Vol. XXV.,
pp. 35—43, 59—61 より作成。

以下の事例はすべて、王領地が断片的な地片であり、それが定期借地として貸出されているか、まとまった領地が分割されて貸出されているかのいずれかである。これらの事例を要約して示すと、表五のごとくである。これらの借地は没収・購入・交換によって王領地となったものであろうが、その詳細は明らかでない。いずれにしても、表によって次のことが明らかである。すなわち、これらの借地は一六世紀後半以降に貸出されて当面の時期にいたっているものであるが、調査官にたいして借地人の権源を立証することができたのは Lagnmarsh と St. Leonard Forest の二つの場合のみである。他の場合は、権利関係がまったく曖昧

であるか、あるいは、借地人が或程度の証拠物件を提示したとしても、借地権を合法的に立証することができなかった。それは、ここでも借地の合法あるいは非合法な転貸によって権利関係が錯綜していたことを示すものであり、王領地管理の混乱を示すものにほかならない。

註(1) この間の経過については D. G. C. Ewens & M. A. Lower, *Additional Notices of the Parish of South Bersted*, S. A. C., Vol. XXV, pp. 112~125 参照。

(2) *Ibid.*, p. 117. これらの領地は、ジェームズ一世から当時ウエールズ皇子 Prince of Wales であったチャールズ一世に譲渡されて、その所領となっており、当時の有名な地誌学者であった John Norden はその調査官に任せられていた。

(3) 王領地の売却後、以前王領地であった村落はウエールズ皇子のハンズレド裁判所に訴訟を提起することを告げ、その結果、ハンズレド裁判所が中断され、住民が別の裁判所を利用していること、そうしたことは皇子の特権の不法な侵害であり、ハンズレド裁判所を復活することが適當であることを、ノーテンは注意している (S. A. C., Vol. XXV, pp. 117~118.)。なお、その際、この裁判所は三週間に一度開かれることが注意されているが、議会の調査記録に現われた three weeks court がこれに該当するものかどうかは明らかではない。いずれにしても、王権の衰退を示すものであらう。

(4) 議会派によるこれらの地域の調査記録はすべて「*all that Common fine*」と称せられ、あるいはその名がわづか知られる地代「*all that rent commonly called or known by the name of Common fine*」のみを記録している。Common fine の性格、その他の詳細は明らかではないが、*Sheriffs ayde money* とも称される点からみれば (S. A. C., Vol. XXIII, p. 227.)、地代とさうより租税の一種であらう。

(5) *Aldwick Hundred* の Court leets を主催する Lord Craven は少なくとも一六四一年には *South Bersted* 教区 (North Bersted Manor) を獲得し、一七三五年まではそれを所有していた (S. A. C., Vol. XXV, p. 116.)。Buttinghill の Court leets を主催する Lord Goring は一五八二年 *Buttinghill* の *Royalty* を他の所領とともに購入した。George Goring の子孫であり、これを相続したものとと思われる (S. A. C., Vol. XI, p. 64.)。その他の地代徴収権者ならびに法廷開催者やそれぞれの地域との関係は明らかでなく。

(6) *Kings Barns* の *Searl, widow*、*Manhood* の *Beauchamp*、*Tipnock* の *Colonel Down* は *Honourable Trustees* から購入し

たと主張するが、いずれもその申立を認められなかった (S. A. C., Vol. XXIII, pp. 230, 242.)。

- (7) Lewis Rape の場合、アーンデル伯が J. Holland, Esquire なる者の「正当な要求を」 in the right of その権利を主張しつゝあること、一つの証拠である。
- (8) S. A. C., Vol. XXV., pp. 54~55.
- (9) *Ibid.*, p. 55.
- (10) *Ibid.*, p. 54.
- (11) S. A. C., Vol. XXV., p. 57.
- (12) (13) (14) (15) *Ibid.*, p. 58.
- (16) *Ibid.*, pp. 58~59.
- (17) Cliffe Leve (表一の②) の場合は調査記録が不十分であり、省略した。

七 結 び

最後に、以上の検討の結果を要約すると次のとおりである。

1、当面の時期のサセックス王領地における管理形態は地域によってさまざまである。したがって、王領地の統一的管理はもはや失われていることは明らかであるが、全体としてみれば、絶対王制の官僚機構にもとづく伝統的な管理方式は無力化しており、一括貸与であれ分割貸与であれ、借地方式が優勢となっている。

2、王領地の管理に関連した諸種の役職を与えられた者、あるいは王領地の貸与を受けた者は大封建貴族あるいはなんらかの形で絶対王制と結びついた州内の有力な土地所有者が多いが、それぞれの領地における管理権あるいは借地の権利関係はきわめて曖昧であり、合法的な管理権者ないしは借地権者が見いだされなかった事例が圧倒的に多い。それは王領地の役人あるいは借地人がその官職や借地を私物化し、合法的な手続を経ずして、官職や借地権を売却・

讓渡・転貸することにより私腹を肥やそうとしたことの結果によるものと考えられる。このことは、一つには、イギリス絶対制の支配機構が次第に空洞化していたこと示すものであり、また一つには、ブルジョア的發展の中で巨大封建所領の経営が大きな困難に陥っていたことを示唆するものといふことができる。

3、王領地のうちの本領地と旧獵園ではなんらかの形で定期借地が導入されており、絶対王制の王領地管機構の弛緩の結果、王領地において新しい土地制度が發展しつつあったものといふことができる。⁽³⁾

4、それぞれの王領地における土地保有農民の比重、彼らにたいする封建的支配のあり方は地域によって異なっている。だが、王領地にたいする国王の統制力が弱体化するとともに、一般に、土地保有農民は封建的支配からますます自由になりつつあり、彼らの前には農民的土地保有を農民的土地所有に転化する展望が開けていた。

5、こうして王領地における封建的土地所有が弱体化する中で、一方では、農民的土地保有の前進、他方では、定期借地の發展という二つの方向が現われていたことが明らかである。

本稿の検討はあくまでサセックス王領地という特定の地域の封建的土地所有の内容という一つの側面に問題を限定するものであった。その結果は、当面の時期においては封建的土地所有が形骸化し、解体寸前にあることの一つの証拠を示している。しかし、このことをもって直ちに封建的土地所有の事実上の消滅、さらに進んで、イギリス革命における農業・土地問題の不在というふうに結論づけるのは早計であろう。⁽⁴⁾すでにのべたごとく封建的土地所有とは国王を頂点とする重層的な土地所有・保有関係とそこから派生する支配・従属の関係であり、したがって、これを近代的な一元的土地所有に転化することによってはじめて消滅するものであり、それは、まず第一に、絶対王制の権力を打倒し、しかるのち重層的な土地所有・保有関係を近代的に一元化するための具体的な措置がとられることによってはじめて実現されうるからである。そして、その具体的な形態は、領主にその領地にたいする近代的土地所有権が

与えられるか、つまり、領主の土地所有と領有が近代的地主的土地所有に転化するか、それとも、農民層がその保有地にたいする完全な土地所有権を獲得するか、つまり、農民的土地保有が農民的土地所有に転化するかのいずれかである。それは、決して自動的に決定さるべき問題ではなく、革命前から革命期にかけての領主と農民の闘争の結果として解決される問題である。それゆえ、この問題の歴史的意義を正しく把握するためには、それぞれの地域における封建的土地所有の内容、農民層のブルジョア的発展のあり方、さらにまた、領主と農民の対立・抗争の具体的形態を明らかにし、それがイギリス革命の全体としての動きの中でどのような位置をしめていたかをはっきりさせることが必要であろう。イギリス革命の農業・土地問題にかんする研究史は地主的路線が勝利したことを示しており、それは疑うことのできない事実であるが、だからといって、それが革命の前からすでに決定されていたなどというのは独断にすぎないであろう。

しかし、右の問題を正しく解決するためにはなお多くの実証的研究を積み重ねることが必要である。そして、弱体化しつつあったことはいえ、王領地は当時なおイングランド最大の封建領地であり、したがって、議会派による王領地の調査記録は一つの大量的な史料として重要な研究素材であり、利用の仕方によっては右の問題を解決するための重要な示唆を与えてくれるであろう。本稿はとりあえず、その一部分について検討を試みたわけである。

註 (1) 王領地の管理者、一括借地人などのそれぞれについて具体的に検討する余裕はなかったが、彼らのうち、ドーシット伯、アーデル伯、Lord Abergavenらは明らかに大封建貴族であり、かつ、絶対王制から多くの官職、特権を賦与されて、絶対王制と密接な結びつきを持っていた。他の者も多くはサセックス州の有力な土地所有者の家族であった。しかも、彼らのうちで革命のときに国王側についたのは Sir J. Camill, Lord Goring, Lord Abergavenら数名を数えるにすぎなかった (W. D. Cooper, *Royalist Composition in Sussex*, S. A. C., Vol. XIX, pp. 91~120.)。このことは絶対王制の統制力が弱体化し、その支柱となるべき階層をすら掌握しえなかったことを示すものである。

- (2) この点については、別稿で検討する。
- (3) 周知のごとく、独占の廃棄がイギリス市民革命の中心課題であるという見解が有力である。もちろん、初期独占が絶対王制の有力な支柱であったことはたしかである。だが、革命にいたるまで初期独占が一貫してそうした役割を果たしたとは思われない。例えば、革命のときに、初期独占の典型であるマーチャント・アドヴェンチュラーズが議会議派についたことは、もはや絶対王制が独占の体制を維持しえなくなっていたことをはっきりと示している。それゆえ、弱体化していたのはなにも封建的土地所有だけでなく、独占もまたそうなのである。要するに、当時、封建的關係が解体に瀕しており、封建的土地所有であれ産業規制であれ、なんらかの形で廃棄されねばならなかったということである。
- (3)、(4) これらの問題については、それぞれ別稿で検討するつもりである。